

22年度活動予定

- 22年11月10日(水) 第5回 三役会・理事会
 12月 8日(水) 第6回 三役会・理事会
 23年 1月12日(水) 第7回 三役会・理事会
 1月16日(日) 新年交礼会 於:明治記念館
 2月 9日(水) 第8回 三役会・理事会
 2月 20日(日)・21日(月) 親睦旅行会(行先未定)
 3月 9日(水) 第9回 三役会・理事会
 4月13日(水) 第10回 三役会・理事会
 4月24日(土) 第34回 定例総会

於:喜山倶楽部(教育会館)

会員募集中!

ふるさと会連合会では会員を募集しています

平成22年10月31日現在
会員数 96 ふるさと会

北海道ふるさと会連合会は相互交流と親睦を図り、北海道に関わる諸団体および協賛企業と協力して郷土「北海道」を応援する、を目的とする親睦団体です。昭和53年に設立され、現在は96ふるさと会(協賛企業9社含む)の加入により構成され、現在加入ふるさと会は増加現象にあります。

平成22年度新規加入のふるさと会のご紹介
 ひがしかわ東京会(東川町)
 東京沼田会(沼田町)

ふるさと会連合会 役員

会長 伊野 達哉 (岩内会) 監事 池田 俊一 (浦河会)
 副会長 渡辺 拓 (札幌会) 監事 久恒 圭 (天塩会)
 副会長 森 隆信 (遠別会) 理事 22名
 副会長 高橋 守 (新冠会)
 副会長 杉村 豊 (深川会)
 副会長 堀口 正顯 (妹背牛会) (連合会事務局局長兼務)

事務局所在地

北海道ふるさと会連合会事務局

東京都千代田区永田町2丁目17-17
 北海道東京事務所3階
 電話・FAX 03(3592)0122

編集後記

自然には人を健やかにする力があるという。然しながら今年の夏は高齢者のみならず、連日の猛暑日が長期化し、列島を苦しめ、大きな災害でもありました。睡眠不足は勿論のことエアコンまでもがギブアップ状態に陥った。

「冷えた」表現が使われたのは、「国内経済と政治政策」そして「地方の景気」である。中央の政治家も中央官僚も地方への出張は極力避けているというマスメディアのコメントが印象的であった。

尤も、テレビのコメンテーターは連日、第3者的批判論を表現し、一般講演を行うより高収入が得られるという皮肉な評判が業界に流れている。我がふるさと北海道も長きにわたる不況の風が定着し、自力による健康回復は困難であると地元からの声が大きく聞こえる。これが犠牲者の叫びである。

中央政府や霞が関は耳栓をして地方と中央を巧みに使い分け、言葉ゲームに表情を変えずに行う姿を見て外国記者から、「先進国と聴いていたけど、貧しさには最も冷たい格差社会の国家」と酷評されている現実がある。

第28号ふるさと連合会会報の原稿募集は、猛暑日が続く7月中旬に90余ふるさと会事務局宛案内を発送、幅広く、特に次世代の皆さんに「ふるさと関連」の原稿を期待しておりました。

ふるさと感が薄らいだ、参加者が減少した、困った、打つ手が無いと口を揃えて主張されている各ふるさと会事務局幹部のなげき節を聴く。しかし、夜の居酒屋で若い世代の会話はふるさととの話題が一番であると統計されている。

ふるさと感が薄らいだのではない、「ふるさと感を共有しない、させない、工夫しないだけである。」との一部会員の声も聴く、ありがたいことに原稿の投稿状況はふるさと会の幹部が多いことから判断できる。会報が会員の皆さんにどのように浸透しているのかを心配しているのである。

10月初旬に代々木公園で開催された第16回北海道産直フェアは昨年を大きく上回り、35万人を超える参加者が記録され大盛況であった。大盛況の舞台裏では「早めの企画立案、ち密な議論、情報の共有化と実行委員の共通認識」が確実に実行され高められたことにある。北海道の食に対する全国フェアはどこでも人気があり盛況である。「人気」は芸能界、スポーツ界同様にその関心度合いを得る大切なバロメーターである。この延長線上にあるのが、地域の観光、経済、産業、雇用に及ぶ経済効果でもあり、地域の活性化でもある。

「ふるさと会」は、年代、世代を超え、ふるさと出身者がふるさと感を共有できる唯一の懇談場所であり、ふるさととの言葉で会話が、安心と信頼を感じることができ、幅広く仲間が増える機会でもある。これをチャンスに「継続と拡大、ふるさと交流とふるさと支援」が発展していくことを期待したい。

北海道には心に残る風景が沢山ある。第28号会報は、歴史とロマンと今のストレスを洗い流してくれる風景「積丹半島」を取り上げました。

今回も3,500部を発行し、各ふるさと会事務局を通じて配付、次世代にも浸透し、併せて各ふるさと会の「継続・拡大」が図られますことを切望したいものであります。

広報部会 小暮安彦